岩手医科大学報

Iwate Medical University News

2014・2　vol.449

●発行者―理事長・学長　小川 彰　●題字―名誉理事長　大堀 勉

盛岡市北山の教浄寺で行われた裸まいり

〈写真撮影：編集委員 畠山正充、１月14日(火)（関連記事：Ｐ４）〉

おもな内容

●― 特　　集　いわて医療情報連携・遠隔医療システム －人口減少と東日本大震災津波後の社会を生き抜く－
災害時地域医療支援教育センター地域医療連携担当・小児科学講座教授　小山　耕太郎

●― トピックス　平成25年度認定看護師教育課程修了式 が行われました

●― 職場めぐりNo.80　生化学講座（分子医化学分野）、看護部（花巻温泉病院２階病棟）

●― フリーページ　すこやかスポット歯学講座No.18　「小児歯科におけるフッ素の位置づけ」
口腔保健育成学講座　小児歯科学分野　歯科医師　奥野　瑛

特集 いわて医療情報連携・遠隔医療システム

－人口減少と東日本大震災津波後の社会を生き抜く－

災害時地域医療支援教育センター地域医療連携担当
小児科学講座　教授
小 山 耕太郎

1．はじめに

岩手県は、その広大さに加え特有の地形から交通の難所が多く、地域格差が生じやすい状況にあります。

本学は、医師の不足・偏在という地域医療の長年の課題に対して、医師派遣に加え、遠隔医療を推進することで対応してきました。その中で起きた東日本大震災津波は、カルテをはじめとする医療・健康情報の流失をもたらし、ICT（情報通信技術）を活用した医療情報の共有と保全の重要性が再確認されました。特定機能病院である本学は、広域医療情報連携ネットワークシステムを新たに構築し、人口減少と医療需要の減少に直面する二次医療圏を支える必要があります。

2．いわて医療情報連携・遠隔医療システム

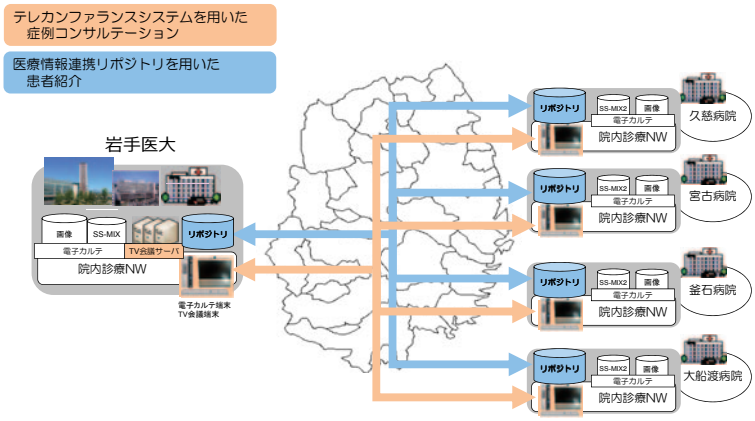

図1：岩手医大が提唱する「いわて医療情報連携・遠隔医療システム」の構想

災害時地域医療支援教育センターは、文部科学省の支援を受け、本学と被災地の医療機関があたかも一つの大きな病院のように、共同して若手医師の教育や住民の診療にあたるシステムの検証を進めています。協力医療機関である県立久慈病院、宮古病院、釜石病院、大船渡病院との間で、①テレカンファランスシステムを用いた症例コンサルテーションと、②医療情報連携リポジトリシステムを構築し、同意を得た患者さんの医療情報を共有するサービスを開始しています（図１～３）。

①テレカンファランスシステムを用いた症例コンサルテーション

HD対応のテレカンファランスシステムを電子カルテの端末として利用するもので、協力医療機関の担当医と本学の専門医とが、テレカンファランスシステムのディスプレイに表示される診療情報（患者基本情報、検体検査、静止画像、動画像等）を共に見ながら相談します。本学と協力医療機関合わせて52台の端末を設置し、2014年1月から運用を開始しています。

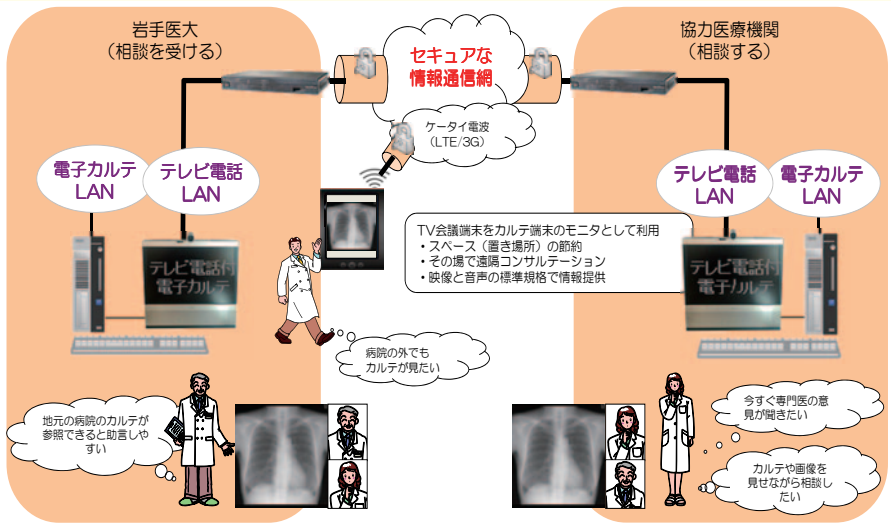

図２

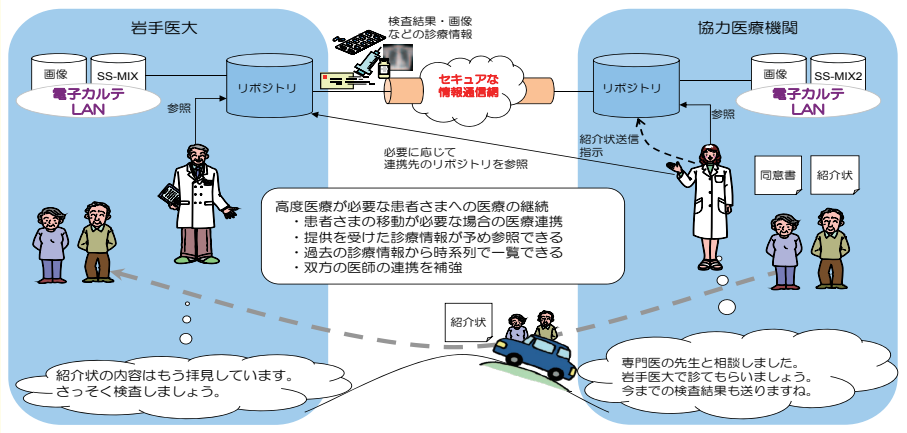

図3

② 医療情報連携リポジトリシステムを用いた患者紹介

協力医療機関と本学との間で患者さんを紹介する際に、紹介状や検査結果等をオンラインで共有するシステムです。紹介元では、手紙やCDによる従来方式に比べ、より詳細な情報を容易に提供することができ、紹介先では患者さんの来院前にそれらを参照することができます。

施設間の一連の診療情報を時系列で一覧できることから、切れ目のない診療が可能になります。2014年1月、大船渡病院と本学の間にリポジトリを構築し、試験運用を始めています。

3．人口減少と医療需要の減少が進む二次医療圏

日本は2010年の１億2,638万人をピークに、人口減少時代に入っています。人口減少の過程は世代によって異なり、2010年以降2090年までは、14歳以下の「年少人口」や15～64歳の「生産年齢人口」は減少し続ける一方、65歳以上の「老年人口」は2040年までは増加し、その後減少へと転ずることが予想されています。しかし、これは日本全体での推移であり、地域別にみると状況は大きく異なります。2013年３月に公表された「日本の地域別将来推計人口」によると、高齢化先進地域である岩手県の「老年人口」は、日本全体に比べ20年も早い2020年の40万６千人をピークに減少します（図４）。また、北東北３県の「老年人口」の推移も岩手県と同様であり、東北６県や北海道に比べても５年早く「老年人口」のピークを迎えるとされています（図５）。

人口動向は二次医療圏の医療需要を大きく変えるものです。2013年８月に発表された「地域の医療提供体制現状と将来－都道府県別・二次医療圏データ集－」によると、2010年から2040年までに岩手県の総医療需要は10％減少すると予想されています。二次医療圏毎の総医療需要をみると、盛岡医療圏こそ８％増加しますが、他のすべての医療圏で減少します。盛岡では老年人口、特に後期高齢者の医療需要と総介護需要が伸びますが、大半の医療圏では介護需要も減少します（図６）。

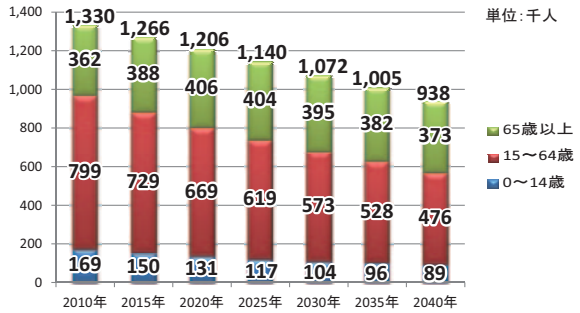

図４：岩手県の将来人口予測

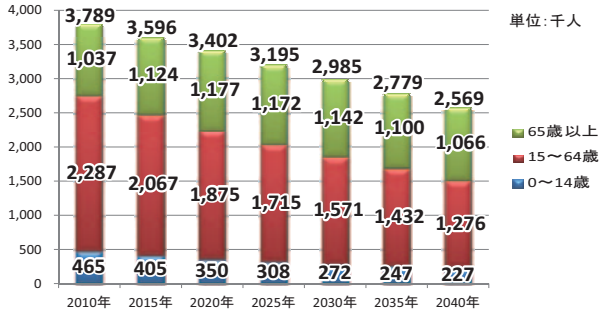

図５：北東北３県の将来人口予測

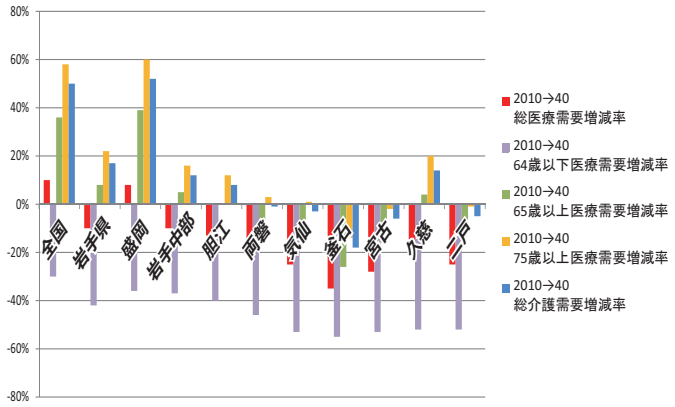

図6：岩手県における2010年→2040年の医療介護需要の増減率

4．おわりに

人口構造の変化は将来を見通すことが困難な中でもっとも確実な変化であり、革新の機会と捉えることができます。医療需要が減少する時代を生き抜くには、医療圏を少なくとも東北・北海道まで広げる必要があります。そのためにも、ICTの新たな活用と医療圏における各医療機関の役割分担を結びつけた、効率的で持続可能な医療情報連携ネットワークシステムの構築が欠かせません。

Topics

平成25年度認定看護師教育課程修了式が行われました

１月23日（木）、創立60周年記念館８階研修室において、平成25年度高度看護研修センター認定看護師教育課程（緩和ケア分野）修了式が行われ、関係者約50名が出席しました。

式では、藤岡知昭センター長から修了生16名に修了証書が授与され、「医療は医学に裏付けられた仁術でなければなりません。患者さんやそのご家族に希望を与える存在として活躍してください。」と式辞がありました。研修生謝辞では、山口郁恵さんが「人と人の繋がりの中で、かけがえのない命と関わっていくことの重要性を学びました。仲間と共に緩和ケアの質を高める努力をしていきたいです。」と力強い決意を述べました。

研修生謝辞

修了証書授与

平成26年度一般入学試験・大学入試センター試験利用入学試験が行われました

平成26年度の岩手医科大学入学試験は、１月22日（水）に医学部一般一次試験、１月31日（金）に歯学部一般前期試験・センター試験利用試験（前期）及び薬学部一般前期試験、１月31日（金）と２月１日（土）に医学部一般二次試験が行われました。

志願状況は、医学部一般が2,958名（前年比761名増）、歯学部一般前期・センター試験利用試験（前期）が87名（前年比19名増）、薬学部一般前期・センター試験利用試験（前期）が316名（前年比79名増）となりました。

表紙写真の解説 ●盛岡・北山 教浄寺の裸まいり

盛岡のいくつかの神社やお寺では、毎年１月の中旬から下旬にかけて「裸まいり」が行われます。その始まりは藩政時代、本学内丸キャンパスから北へ800 mほどの時宗（じしゅう）教浄寺、いわゆる「お阿弥陀さん」の裸まいりにあると言われています。東北地方の裸まいり・裸まつりとしては、蘇民祭（奥州市・黒石寺のものが有名）のように押し合いによって年占いをする動的な例は比較的広く見られるものの、採物（とりもの）を持ってゆっくりと時間をかけて歩くお参りは、岩手と宮城に数例しか見られないと言います。厳寒のなかでの静的な練行には、見ているものの心身をも清めてくれるように感じさせられます。

1933年の岩手医学専門学校 衛生検査部部報には、小泉浩吉 博士による「裸詣りに就いて」という報文が掲載されており、「裸詣りの採尿検査成績」が報告されています。

（写真：畠山正充、解説文：松政正俊）

シリーズ 職場めぐり No.80

生化学講座（分子医化学分野）

生化学講座分子医化学分野は、岩手山を望む美しい眺望に恵まれた矢巾キャンパス西研究棟２階にあります。現在は古山教授以下計３名のスタッフで細胞生物学、分子医化学と分子生物学の講義および実習を担当しています。

研究活動では、ヘム生合成経路の主要な調節ステップを触媒している、アミノレブリン酸合成酵素の機能の調節機構を、生化学的・分子生物学的手法により解析しています。ヘム代謝異常により引き起こされる疾患の治療に、我々の研究が寄与することを目標としています。この他にも共同研究者、研究生や生化学研究に興味を持つ学生などのヘテロな人たちが集まって各自の研究テーマのもと、互いに切磋琢磨しています。

和やかな中にも、真摯に対象に取り組む雰囲気は、教授が昨年９月に着任されて以来着実に育っているように感じます。共同研究や大学院生としての参加も歓迎しますので、私達の研究に興味を持たれた方は是非お立ち寄り下さい。

（准教授　久保田美子）

看護部（花巻温泉病院２階病棟）

花巻温泉病院２階病棟は、「やさしさと思いやりのある心をもち、笑顔でゆとりある対応ができる」を目標に始業時のウォーキングカンファレンスでは患者さんに明るく挨拶をすることを心がけています。

診療科は内科（消化器・循環器・糖代謝内科・一般内科）・外科の混合病棟です。内視鏡下大腸ポリープ切除術・睡眠時無呼吸症候群検査・そけいヘルニア手術などはクリニカル・パスを活用し患者さんに安全・安心な医療の提供に努めております。また、高齢者の方やがんの終末期の患者さんには身体的・精神的苦痛の緩和を図り、患者さんがご家族との生活や時間を大切に過ごせるよう援助しています。

後期高齢者の方が多く、入院時から退院調整を図り、ケアマネージャーや地域介護施設との連携を密にし、ご家族を含めた支援を実施しています。患者さんとご家族が安心し満足できる看護が提供できるよう心がけて援助しています。

（主任看護師　佐藤真由美）

理事会報告

■12月定例（12月16日開催）

1．教育職員の人事について

小児科学講座

教授　　小山　耕太郎（前 特任教授）

内科学講座呼吸器・アレルギー・膠原病内科分野

特任准教授　中村　豊（前 講師）

産婦人科学講座

特任准教授　小山　理恵（前 講師）

（発令年月日　平成26年１月１日付）

病理学講座分子診断病理学分野

准教授　　川崎　朋範

（現 山梨大学医学部人体病理学講座助教）

（発令年月日　平成26年４月１日付）

2．運営協議会の見直しについて

①学校法人岩手医科大学寄附行為施行細則を一部改正

②学校法人岩手医科大学運営協議会規則の廃止及び学校法人岩手医科大学運営会議規程を制定

③組織規程を一部改正

（施行年月日　平成26年１月１日）

岩手医科大学募金状況報告

● 総合移転整備事業募金　～ 皆様のご厚志により支えられています ～

平成21年6月から始まりました岩手医科大学総合移転整備事業募金に対し、格別のご理解とご支援を賜りました皆様方お一人おひとりに、厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

皆様のご厚志は、大学発展の大きな原動力となるものであり、本事業の早期達成のため有効に活用させていただいております。

今後とも関係各方面からの格別なるご協力・ご支援を賜わりますよう衷心よりお願い申し上げます。

今回は25回目の御芳名紹介です。（平成25年10月１日～平成25年12月31日）

※御芳名及び寄付金額は、掲載を希望されない方については掲載しておりません。

会社・法人等

＜200,000円＞

医療法人社団　青空会大町病院（福島県）　（敬称略）

個　人　等

＜2,000,000円＞

小　川　　彰（役員）

＜1,000,000円＞

山　本　　馨（一般）

＜ご芳名のみ記載＞

立　花　成　勝（元職員）
金　子　　克（名誉教授）
佐　藤　　信（在学生父母）
増　田　友　之（教職員）
（受付順、敬称略）

これまでの募金累計額

区　分	申込件数	募金金額(円)
圭　陵　会	480	395,872,000
在学生父母	195	174,140,000
役員・名誉教授	41	72,910,000
教　職　員	120	18,935,000
在　学　生	1	100,000
一　般	127	436,842,922
計	964	1,098,799,922

（平成25年12月31日現在）

お知らせ　個人からの寄付に係る所得税の税額控除制度導入について

本法人に対する個人からの寄付金の税制上の優遇措置は、これまで「所得控除制度」が適用されていましたが、平成23年度の税制改正により、平成23年１月１日以降のご寄付に対して「税額控除制度」の適用が可能となりました。

このことにより、現在、「所得控除」と「税額控除」の２つの制度の適用が可能であり、どちらか一方の制度を寄付者の選択によりご利用いただくことになります。

なお、寄付の目的によっては本制度が適用されない場合がありますので、ご不明な点は企画調整課（TEL 019－651－5111（内線7022・7023）　E-mail:kikaku@j.iwate-med.ac.jp）までお問い合わせください。

＜税額控除額の算出式＞

［税額控除対象寄付金（※１）　－　2,000円］　×　40%　＝　税額控除額（※２）

※１　寄付金支出額が、総所得金額等の40%に相当する金額を超える場合には、40%に相当する額が税額控除対象寄付金となります。

※２　控除対象額は、所得税額の25%を限度とします。

学　事　案　内

＜平成25年度最終講義＞

日時：平成26年３月３日（月）午後１時30分より
場所：本学講堂（歯学部棟４階）

1．遠山稿二郎　教授（超微形態科学研究部門）
2．佐藤　成大　教授（微生物学講座感染症学・免疫学分野）
3．澤井　高志　教授（病理学講座先進機能病理学分野）
4．藤岡　知昭　教授（泌尿器科学講座）
5．小川　　彰　学長（脳神経外科学講座 前教授）

＜平成25年度卒業式＞

● 岩手医科大学
医学部、歯学部、薬学部、大学院医学研究科・歯学研究科
日時：平成26年３月７日㈮　午前10時
場所：岩手県民会館大ホール

● 岩手医科大学医療専門学校
歯科衛生学科、歯科技工学科
日時：平成26年３月６日㈭　午前10時
場所：本学講堂（歯学部棟４階）

岩手医科大学報　第449号
発行年月日　平成26年２月28日
編　集　岩手医科大学報編集委員会
事務局　企画部　企画調整課
盛岡市内丸19 - 1
TEL 019-651-5111（内線7023）
FAX 019-624-1231
E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp
印　刷　河北印刷㈱　盛岡市本町通2 - 8 - 7
TEL 019-623-4256
E-mail: office@kahoku-ipm.jp

すこやか
スポット歯学講座
No. 18

口腔保健育成学講座
小児歯科学分野
歯科医師　奥野　瑛

小児歯科におけるフッ素の位置づけ

わが国の小児齲蝕は、全体としては減少傾向にあります。しかし、一方では齲蝕罹患状況において、まだまだ地域格差や個人差がみられ、齲蝕が全くない子と重症な齲蝕が多い子とに二極化しているようです。乳幼児期、学童期を通じて齲蝕のない健康な歯や口腔を保つことは、将来の健康にも関係してきますので重要です。

小児歯科の仕事として齲蝕の治療を行っておりますが、麻酔の注射をされたり、歯を嫌な音のする機械で削られたりすることは、子ども達にとってはこの上ない苦痛と恐怖を感じることでしょう。その苦痛と恐怖を少しでも和らげるのが小児歯科医の使命ですが、もっとも望ましいのは、齲蝕にならないように予防することであり、その手段の一つがフッ素ということになります。

歯磨きで残ってしまった歯垢の中で酸が産生され、歯の表面のカルシウムが溶けでます。その周囲にフッ素があると歯を再石灰化してくれる効果があります。また、歯に取り込まれたフッ素には歯を溶けにくくする効果もあり、さらに酸を産生する虫歯菌の活動を抑制してくれる効果も知られています。フッ素のこうした効果を引き出すためには毎日の歯磨きでフッ素含有の歯磨き粉を使うことに加えて、歯科医院での定期的なフッ素塗布をお勧めしたいと思います。

歯科医院で行うフッ素塗布には、綿球に薬液を浸して直接歯面に塗布する綿球法（写真１）と、薬液をしみ込ませたムースをトレーにのせて口腔内に挿入するトレー法（写真２）があります。用いるフッ素にも液体、ジェル状、ムース状などの種類があって、小児の協力度などによって使い分けられています。「フッ素を塗ってもらったから虫歯にならない」ということではありません。毎日の生活の中で、甘いものを取り過ぎたりしないように食事や間食に注意し、食後は歯磨きをするようにしてください。

写真１　綿球法

写真２　トレー法

第118回大学報編集委員会

日　　時：平成26年２月20日(木)　午後４時～午後５時

出席委員：山崎　健、影山　雄太、松政　正俊、齋野　朝幸、小山　薫、佐藤　仁、山尾　寿子
佐々木　さき子、昆　由美子、畠山　正充、藤村　尚子、武藤　千恵子、野里　三津子